

堤林数衛の精神的「回心」

——「南方関与」の近代的類型——

矢 野 暢*

Japan's Involvement with Southeast Asia in the Period before World War II—Kazue Tsutsumibayashi

Toru YANO

This article aims to clarify an important facet of Japan's relations with Southeast Asia, referred to as "Nanyo." As a case study of how the patterns of Japanese involvement in the region changed, the life history of Kazue Tsutsumibayashi will be analyzed.

Tsutsumibayashi went to Java at the age of thirty-eight in 1910, with fifteen young Japanese he had selected. In contrast to those Japanese who had been in Java earlier, he was strongly marked by a sense of mission and moral conduct. Starting as a petty peddler, he eventually succeeded in establishing a chain of *toko djepang* "Nanyo-shokai" all over Java.

Tsutsumibayashi's case was a very significant departure from the earlier pattern of Japanese presence in Southeast Asia, which was more or less characterized by unique and limited professional orientations like prostitution. This departure was made possible by Tsutsumibayashi's dedicated belief in Protestantism, which contains ethical elements conducive to rational economic conduct as propounded by Max Weber.

In this paper, the author aims to clarify two aspects of Tsutsumibayashi's intellectual life. His thinking is examined to determine the influence of his religious beliefs, and the process of his transformation from a dedicated Protestant to a dedicated supporter of Japan's expansion into Southeast Asia must be clarified. For this, the diaries he kept during his trip to Java are used.

本編の目的は、明治から昭和にかけて生きた堤林数衛という一人の日本人がどのように南洋に渡り、そこでどのような関与のパターンを見せたかを探ることによって、「南方関与」論の一つのケース・スタディを試みることである。¹⁾

ここでいう「南方関与」とは、日本近代史を色どる日本人海外進出の一環としての、日本人と南洋(東南アジア)²⁾との関わりの総体のことである。「南方関与」が日本の国益追求のための

* 京都大学東南アジア研究センター

1) 本論文は、昭和52年度文部省特定研究「アジアの文化摩擦」の中の「近代日本の南方関与」班および資料収集班での研究成果の一部として執筆されたものである。

2) 「東南アジア」という表現は、昭和10年代に見られる一部の限られた例外は別として、太平洋戦争前および戦中の日本では使用されなかった。戦前と戦中の正統的表現は、「南洋」ないし「南方」であった。

国策となって、これが公的に組織的に行われた場合のことを、ふつう外交史用語として「南進」と呼ぶが、むしろ「南方関与」は「南進」をも内に含む上位概念である。事実、日本が「南進」政策を採る以前から、日本人の「南方関与」はさまざまな形で現象化していたのである。³⁾

「南方関与」は、日本人の海外流出という物理的現象であったとともに、日本人が異なった歴史的背景と文化的特質をもった社会とどう関わったか、という文化接触論的範疇の現象でもある。さらに、そのような日本人が関与の対象としてなぜ南洋を選び、そこでどのように生きたか、という問題を掘り下げていくと、日本人総体の精神史的な問題性が浮かび上がるだけでなく、南洋と関わった日本人一人一人のかけがえのない個性までが浮き彫りにされてくるのである。そして、そのようなレベルまで問題を掘り下げる知的作業は、日本近代史のある側面を洗う手続きとして、すこぶる重要な意味をもつのである。

本稿の目的は、明治の末にジャワに渡った堤林数衛という特異な日本人を素材として取り上げ、近代日本人の「南方関与」がどのようなユニークな特徴をもったかを描き、そこにまつわったさまざまな精神的諸問題の一端を浮かび上がらせることにある。むしろ、「南方関与」という巨大な歴史的現象のすべての側面がここで描き上げられるわけではなく、遠い将来に、その全貌を体系的に描き上げるための一つの素材を提供するだけのことである。当の堤林数衛自体についてすら、ここでは、かれの人間像のごく一面が辛うじて捉えられるだけであって、かれの生涯を克明に辿るのは本稿の狙いではない。そしてまた、堤林数衛の一生が日本人の「南方関与」の典型的なパターンを示しているわけでもない。しかし、それだけに、かれの関与のパターンには、なにかかけがえのない、だいじな特徴が見られることも間違いないのである。

I

堤林数衛は、明治6年12月26日、山形県新庄町宮内に生まれた。父繁美は新庄藩の槍術師範であったが、職禄わずか150石の士族とあって、明治維新後は没落士族の道を進んでいる。母キワは藩主戸沢家の侍医松井英泉の長女であり、繁美とのあいだに男1人女5人の6人の子供をもうけ、数衛は姉2人妹3人にはさまるただ1人の男子であった。⁴⁾

堤林数衛の経歴をくわしく辿るのはここでの課題ではないので、かれが南洋と関係をもつまでの中間の経過ははしょって、話をかれの渡南の経緯にもっていくことにしよう。⁵⁾

明治28年、満で21歳のとき、かれは台湾に渡っている。かれ自身、この台湾行きを人生の画期的なできごととして重視して、後年、次のように書いている。「私が南洋と関係を持つ事に

3) 近代日本の「南方関与」を概観したものとしては、矢野暢『南進の系譜』（中公新書、昭和50年）がある。

4) 堤林の家系については、山形県新庄市の堤林三郎氏の許に保存されている「堤林系図書」が参考になる。これは、筆跡から判断する限り、堤林数衛自身の手になるものであり、それだけに、真偽よう性についてはいささか問題がある。

5) 堤林数衛の生涯については、大政翼賛会山形県支部『堤林数衛』、昭和19年、および『山形県史——拓殖編』901～924ページが参考になる。



写真1 青年期の堤林数衛。現存するものとしては、いちばん若い時代の写真である。



写真2 青年期の堤林数衛

なりました由来は、日清戦争の動機より支那に渡って志を立てたいと云ふことを思いまして、遂に明治29年1月其の便宜上先づ台湾に渡りましたが端緒であります」。⁶⁾ この台湾渡航から明治の末までを、人生の様相の変化に従って、いくつかの時期に分けて捉えることができる。第1期は、明治28年から同30年まで、第2期は、明治30年から同40年まで、第3期は、明治40年から同42年まで、第4期は、明治42年以後、という時代区分が成立するように思う。

まず第1期の時期において、堤林は、台湾総督府の看守に就職しながら、監獄課長の好意ある配慮で通常の勤務を免れ、「他日通訳に養生するために」福建語の学習に専念している。

第2期は、たまたま親しくなった現地の貿易商郭春秧という人物の懇請を受け、依願免官に踏み切り、郭の経営する郭河東公司の書記長として勤務する時期である。⁷⁾ 最初の5年間は郭のために働いたが、明治35年には郭の了承を得



写真3 台湾時代の堤林数衛

6) 『南洋商会創立拾年之苦心談』（直筆原稿）より。これは、ノート2冊に克明に書きつけられた堤林の自叙伝であり、注目すべき資料である。大正6年頃の執筆と思われる。

7) 郭春秧は、堤林の手記によると、「広く台湾、厦門、香港、新嘉坡、爪哇等の各地に多くの店を持って盛んに貿易を営み彼地にては稀なる人格を有し傑出せる人物であると云うことを親しく知るに至り……」（『苦心談』直筆原稿より）、とある。

て独立し、台北市内に呉服屋と質屋を開店し、かなり大をなすに至っている。

第3期の明治40年からの2年間は、堤林の人生において、もっとも不思議な時期である。この2年間は、堤林は日本で過ごしている。明治40年に台湾から新庄に戻り、直ちに郷里の女性と結婚しているが、あたかもこの結婚がきっかけになったかのように、別人のように内省的になり、読書にふけり、主として宗教についての知識を得ようと努めている。その当時の模様を、堤林は、後年次のように書いている。

「既往を顧みて自分が商業に従事して常に利益のみにあせり金儲けの方法などのみ工夫する間に自然金銭欲が募り品性も知らず知らず堕落したと云ふことにも今更に気付いて事は志と違ひ非常に前途を悲観し、遂に当初の精神を善良に貫徹し、今後の生活をして生命の充実するものたらしむるには一時幸福と思った境遇より再び脱出して精神的に奮闘しなくてはならぬと云ふことに目がさめたのであります。同時に自分の修養の貧弱だと云ふ事をも気付いて爾来二年間は別人となって読書修養の事に日を費したのであります。其間仏教のことも聞き基督教のことも学び凡て精神上に關したものは出来得る限り之を獵り求めてきたのであります」。⁸⁾

けっきょく「其の修養をしている間に偶然基督教に接しまして始めて自分が二カ年間煩悶した難解な問題を易々決定する事が出来た」という最後的心境に至り、堤林は、明治41年、九段富士見教会の植村正久牧師の感化を受けてキリスト教に入信するのである。⁹⁾そして、明治41年暮から翌年正月にかけて、堤林は、伝道師マッソンと伊豆半島から大島にかけて伝道的行脚を行い、自分の残る半生をどう過ごすか、という問題と取り組むのである。

「私は明治41年の暮から正月にかけて自分の残る半生を如何に過さんと云ふ問題を決定せむ為め伊豆半島から大島にかけて伝道的行脚をなし或は教友を訪ひ暮正月の賑を五月蠅く避けて静かに考えたのであります。そうして伊豆半島の三原山に雪を踏んでマッソン宣教師と登山し噴火口の傍に坐して独り長き祈禱を致し、黙想して居る中に自分は偶然一の暗示を与へられたのであります」。¹⁰⁾

この「一の暗示」とは、ひとはそれぞれ天職天命を帯びて生まれているのであり、台湾生活で貿易についての知識経験を培ったのもけって偶然ではなく、無用ではなかった、これまでの知識才能の蓄積を生かして人のため、世のために尽くすのが其の使命だ、ということであったという。この抽象的な暗示から、堤林はまたたく間に具体的な実践的課題を引き出している。「その頃米国では日本移民排斥問題が盛んであって、我が青年の海外発展者の行き場に困って居たので、此処に従来の智識を活用して此の救済に尽くし、他面に正しく営利して日本の伝道に便じ、自分にも国家にも精神的に満足なる事業を建て様と、それが又神に対する謝恩

8) 『苦心談』より。

9) 堤林は、明治41年、妻と共に上京し、東京で暮らすようになっている。

10) 『苦心談』より。

にもなることと心を極め、勇んで東京に帰ったのであります」。¹¹⁾ この時、堤林は37歳であった。

堤林は直ちに植村牧師を訪れて、南洋で活躍する青年の養成に尽くしたいという決意を披瀝し、そして協力する青年の募集を頼んでいる。植村正久は各教会に依頼して信徒のうちから希望者を募ったところ、二百数十名の応募があり、その中から堤林が最終的に15名を選び出したという。

堤林が、この段階でなぜにわかにキリスト教に入信したのか、この回心の具体的契機はまったくつまびらかではない。ただ、あとにくわしく取り上げるかれの自筆日記「時々の正記」の中のある箇所に、次のような記述があるのはすこぶる意味深長である。

「妻を愛するに因りて再生の宗教起り、其希望を満し家庭人生の意義を現実に味へん為めに事業起り、組織の欠かんを内部の不平者は癒し、……三、四年の生活の変化思起せば大なり」(明治43年7月6日付)。¹²⁾

この明治43年夏の一文は、「三、四年の生活の変化」すなわち過去三、四年の来し方を回顧しての感慨であるわけだが、ここでは、入信の契機として「妻を愛するに因りて」と記してあるほか、かれの渡南の動機として「家庭人生の意義を現実に味へん為め」と書いている。これらの抽象的な表現はなにかを物語っている筈なのだが、具体的なことを知る手掛りはまったくない。

いずれにしても、こうして劇的な第3期は終わり、第4期に移る。第4期は、その青年たちを連れてジャワのスマランに渡り、厳しい行商生活を行う時期である。¹³⁾

「目的のスマラン港には五月十二日に着港し直ちに自ら荷物を掲げ異域に日本語の声掛などを外人にいぶかられつつ未明に及んで漸く支那人の安旅館に一泊した その翌日には直ちにスマラン市アロー街と云ふ所に借家移転し掃除を励まして二階の板間に座を敷いて一行の寝床としてその日から卓一個で開店したのであります。是れが明治四十二年五月十三日即ち爪哇開業の第一日で実に着港の翌日

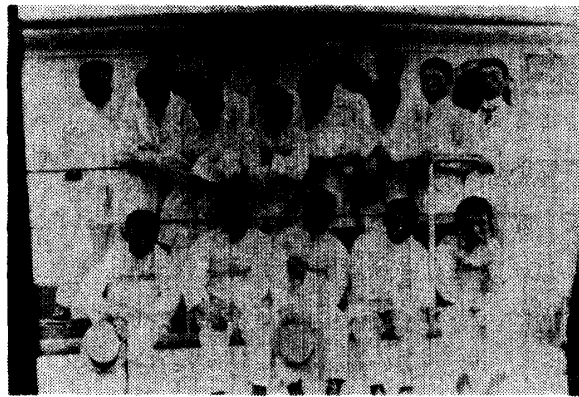


写真4 堤林が日本の青年を引き連れてジャワに向かう時の情景。この写真が明治42年の初めての渡航の時のものだとすると、歴史的な写真だということになるが、そうだという確証はない。人数の食い違いが気になる。

11) 同より。

12) 「時々の正記」第二号85ページ。

13) 堤林があえてジャワのスマランの町を選んで渡った事情としては、ここに例の郭河東会社の支店があり、明治30年代に一度ならず訪れた経験があったこと、および小川利八郎という先住の日本人がおり、その小川の姉の北原哲子は牧師未亡人、という因縁があったことなどが考えられる。

でありました」。¹⁴⁾

このような少なくとも4期にわたれる人生の転変の結果、堤林は、山形県出身であるという点にまず第一の特徴があり、次いで台湾の貿易商の許で十年間の生活を送ったという体験が第二の特徴であり、第三には、人生のある段階でキリスト教に入信し、その後の諸行動を信仰のエトスで律していくというユニークな特徴をもっていた。このようないくつかの複合的な条件が重なって、堤林数衛は、南方に渡った日本人としては先例をみない新しい類型となるのである。

ところで堤林は、自らの南洋での生活について、克明な記録を残した数少ない日本人の一人である。¹⁵⁾ かれが15人の青年と共にスマランに定着したのは明治42年5月であったが、翌43年1月から、日記とも随感集ともいえる記録を書き残し始めている。堤林はこれを「時々の正記」と名付けている。そして、このような時折の思いを書き付ける習慣は、昭和13年まで続けられるのである。¹⁶⁾

「時々の正記」の第一号は、従って、明治43年1月1日から始まるが、その冒頭に書きつけられてあるのは次の文章である。

「大切な昨年の日記遂多忙と不注意で書落した 本年こそは出来る文書なければならぬ 今の日送りは信ずる先生にも信ずる友にも最も分る妻にも判らぬ生活 此地の友として永遠の友か浮草のむれか多くは呉越の間柄なれば、信ずる人特に愛する家族及必要ある数馬謙受の為には書いて置かじ 精神に及ぶ文章と云ふ事は分らぬが境遇は大文章の様に思われる 祈て誓て所感出来事を実写する名けて信ずる人の○見るべからざるの記と云ふ」

この文章で始まる「時々の正記」が、堤林数衛という、南方に関与した一日本人の生涯を知る上で決定的に有益な一次資料であることはいうまでもないとして、そこに書き留められた内容の分析を通じて、一人のキリスト者が、幾重にも屈折した心理的展開をみせながら、最後はごく平凡な市井の「南進論」者にまで変わっていく、その発展の過程が如実に読みとれるという意味でも重要な資料となっている。

初期の頃の「時々の正記」に書かれてある事柄を、内容の傾向別に大別すると、心の中の思いをごく思弁的、抽象的に書き連ねたもの、旅先で観賞した自然環境ないし風景についての描写、自分を取り巻く人間関係についての記述、そして自らの行動記録などにわけられる。

心の中の思いを抽象的に書いた箇所を例示すると、たとえば、次のような文章が典型的なものである。「人は読書が大事で向上進歩の石炭なるが機関はモク想だ 之れなければ心の位置

14) 『苦心談』より。

15) 日記文のようなものを書き残した日本人として有名なのは、他にシンガポールの開業医であった西村竹四郎がいる。かれの文章は『在南三十五年』（安久社、昭和11年刊）として刊行されている。

16) 堤林日記は、現在、21冊残っていて、明治44年頃の分と大正初期の分とが欠けていて見当たらない。

と方向が判らぬ 燃料と無駄が多い 衡^マき当りて戻道が多い 歩みが遅れる 発明がない 自信が弱い 而しモク想は神の前にて何事も考えよ 神は真理だ 出来れば祈禱してせよ」(明治43年2月15日付)。別の例を引こう。「祈禱は霊と誠真とを以て祈るべきは主の教である 真の礼拝祈禱は神より呼ばれて色々の導きか現はれ 導かれて真意が走り出てゝする時と自ら勉め励み又まして神から礼拝祈禱の時を許されるの時と二つある」(明治44年1月13日付)。このような思弁的な記述は、日記体であるというよりは短編の評論のような記述であって、事実、堤林は、そのような記述の冒頭に題をつけるのが常であった。たとえば、ここに引用した二つの文章でいえば、前者は「神愛なりの真理讃美すべきなり」と題され、後者は「祈禱に対する吾希望」と題されている。当然のこととして、このような箇所には「神」が頻繁に登場する。

旅先での風物についての記述が少ないのは、堤林が「自然の風物」ということに、ある特殊な意味をこめていたことと無関係ではなさそうである。かれは、たとえば明治43年2月16日付の日記に、次のようなことを書いている。「今日景色に因り大説教を受けたる 尊敬もせぬ何か参考の一節もかなと読んだ雑誌は余りに書く処が小さく今時の人心益々嫌に感した 鳴天景は大なり美なり教なり」。堤林の自然環境の描写は、このような哲学に従っての美文調、詠嘆調の描写の場合と、そしてまたそれとは逆に、ごく客観的な写真描写の場合とにわかれている。日記のところどころには山の形などのスケッチがあるが、これはその写真描写への関心のほうの証拠である。

自分を取り巻く人間関係についての記述は、後にも述べるように、堤林の思想との関係もあってひじょうに重要である。これについては次節で詳説するが、表現のスタイルを示す意味で、一、二例を示しておく、おおよそ次のような文章である。「横山と交渉 同氏は七分心なき乱暴ものなり 小川との間悪しく余の小川と近くが故に又久しく感情の敵なり 然れども吾れは吾れにして小川中のものにあらず 余の見る同氏は甚だ軽きなり」(明治43年4月中旬の記述、日付なし)。この文中の横山は、同じスマラン在住の横山洋行店主横山平四郎氏、小川は売薬行商で有名であった小川洋行店主小川利八郎氏のことと推測される。

いずれにしても、このような初期の「時々の正記」を読むと、堤林の精神の働き方がひじょうに観念的であったことが一目瞭然である。¹⁷⁾しかし、堤林自身は、「実写」ということをひじょうに気にしていたようで、明治43年2月15日付の日記には、次のような文章がある。「此頃は次第に記事が実写が出来て嬉しい 独歩君の記事を見てから一層平気で書くようになった」。¹⁸⁾

堤林にとって、このような日記を付けることはどのような意味があったのだろうか。そのことを知る手掛りも、実は、日記の中の記述に秘められているように思われる。

17) 堤林自身、自分の記録の観念的傾向を反省して、「時々の正記」第五号の冒頭に、次のように書いている。

「カラバやピサン(椰子バナナ)の香を忘れたる如く趣味の正記を勉めぬ事今はくやしく惜むなり」。

18) 「時々の正記」第一号49ページ。

まず第一に、堤林にとって、自らの境遇を記録に反映させておくこと、そのこと自体に積極的な意味があった。それは、先ほど引用した「時々の正記」の冒頭の所感が示しているように、「信ずる人特に愛する家族」のためになにか書くことは、堤林の信仰生活の一部であった。「余は自分のために書くのではない 書かなければ生活を妻子に迄暗黒にしては気の毒だからだ」。¹⁹⁾ かれが「境遇は大文章の様に思われる」と書いているのは注目すべき洞察であって、境遇を描写することによって、かれの理想とする「精神に及ぶ文章」が書けると信じたのである。かれは、「通信は心の表しにして之れは口にて語ると筆にて語るとの差のみ」と、ある日の記録に「通信」論を書きつけており、他人との対話だけでなく、文章表現をも「通信」の重要な要素として意識していたことがよくわかる。「言はん事より書く事を勉むるは礼なり利なり」と書き、執筆を「礼」とも「利」とも捉えていたことがこれでわかる。しかし、むろん、「対話」をも重視していたわけで、「一席の談話は将来に有益快感崇高等何等の善的印象を与へざるへからず之なくば、談話の価値なきものなり」と書いている。いずれにしても、堤林にとっては、なにか対象を定めて、それと「通信」を試みることは、ひじょうに意味深いことであったようである。従って、かれの日々の記録は、たんなる没我的な実写であるよりは、対話の相手は無意識の裡に意識しての語り掛けであったと解釈すべき性質のものであった。しかし、語り掛けであった以上、たとえ文章作法は観念的であったとしても、反面で「実写」ということを絶えず気にしなくてはならなかった。

ところで、このような素材の中から、堤林数衛についてどのような特殊な問題を掘り起こすことができるだろうか。ここでは、さしあたって、二つの事柄に問題をしばって議論を進めていくことにしよう。その二つの問題とは、一方では、キリスト教に入信した堤林にとって、「南方関与」はなにを意味したのか、もっとはっきりいうと、堤林にとって、ジャワに渡っての行商および商店経営という経済行為は、宗教的行為であったのかなかったのか、という問題がある。もう一方には、敬虔なキリスト教徒として「南方関与」に踏み切ったかれが、その後、自分自身と南洋、あるいは日本人としての自分と南洋、はては日本と南洋という関係をどのように意識し、それをどのように一つの思想的体系として結晶化させていったか、という問題がある。

この二つの問題、すなわち簡単にいってしまうと、経済行為と信仰との関連性の問題および「南進論」への世俗化的回心の有無の問題は、それぞれ含むところの多い問題であり、特に前者についていえば、近代日本キリスト教における信仰受容のあり方とその質の内容という宗教社会学的な意味連関をもつテーマであり、理論的枠組を安易に設定することは危険ですらある。後者の問題についてみても、ある一人の日本人が「南進論」に傾斜する場合に、それとその個

19) 「時々の正記」第一号40ページ。もっとも、堤林は、同第五号53ページには、次のように、少し考えが変わったような記述を残している。「始めは万一の遺言と云ふ意味で多く妻の為に書いた 夫れを妻が冷淡にしたので正記は怠り勝つことなり此頃は自分の為に書く様になった」。

人の内面における精神的遍歴の軌跡にだけ着目をして描き上げるのは妥当であるとはいえず、日本の社会的風潮およびそれを基底から支える歴史的展開などにまで目配りする必要があるのは当然であろう。

ここでは、とりあえず、そういう困難は十分わきまえながらも、堤林数衛個人の描いた心理的、精神的軌跡の変質のあとを実証的に追うことによって、かれ特有のユニークな精神世界、およびその内部での変化の契機に迫ってみることにしたい。

Ⅱ 経済行為と信仰

堤林数衛は、明治42年4月15日に15名の青年を率いて横浜からジャワに向けて出発している。

この渡南をそもそも発想した理由として、かれは、次のように説明している。「その頃米国では日本移民排斥問題が盛んであって、我が青年の海外発展者の行き場に困って居たので、此処に従来の智識を活用して此の救済に尽くし、他面に正しく営利して日本の伝道に便じ、自分にも国家にも精神的に満足なる事業を建て様とこれが又神に対する謝恩にもなることと心を極め……」（傍点筆者）。²⁰⁾

この説明は重要な問題提起を含んでいる。文面から明らかなように、堤林の渡南のモチーフには、青年の海外発展の援助ということと並んで、「正しく営利して日本の伝道に便じ」という目的があったわけで、しかもこのような複合的な動機による渡南行為が、全体として「神に対する謝恩」とであると意識されていたのである。²¹⁾ すなわち、問題を整理して考えてみると、堤林のこの明治42年の決断は、信仰とそれに基づく伝道の実践、およびその表現および実現の場としての経済行為、という基本的な動機構造をもっていたということになる。そして、少なくともこの当時、すなわちジャワ生活の発端部においては、かれの信仰と日常的活動とのこのような結合関係は矛盾も破綻もなかった。²²⁾

ジャワに渡った堤林が日常的になしたことは行商であった。そして、その行商のなされ方は「朝は必らず一番早い汽車にて出発し昼には殆ど四年間満足の食事処か時



写真5 明治43年当時の堤林の行商風景。たいそう珍しい写真である。

20) 前掲『苦心談』直筆原稿より。

21) この二箇所の表現は、大正7年に印刷公刊された『苦心談』のほうではそれぞれ「正しき営利を以て日本の伝道を助け」「之こそ神に対する唯一の謝恩である」となっている（8ページ）。

22) 「時々々の正記」のある箇所では、堤林は次のような表現を用いていて興味深い。「そろばんを以て無限の信仰の船に乗て行くのだ」（第二号73ページ）。

間が惜しくて立ち乍ら生卵の一、二かパンの一片に腹を塞ぐ位で、昼の絶食も多かったのである。假令風雨の一日も休みし事はありません。……衣服とても此四年間は日本から持って行ったものを着尽したという丈で、新調したことなく、靴には総て釘を打って永く保つ様にし、三等汽車以外は徒歩主義で、荷物の揚げ卸し迄皆自分で遣りました」²³⁾ という具合であった。この行商は、まったく現地の人びと相手に限られ、同業の日本人は皆競争相手と意識された。

この行商は、堤林にとって、先程のような複合的な意味をもったわけだが、その事実、すなわち、経済行為と信仰との一致化を求めたという事実は、かれ自身の言葉によっても、次のような形で確認されうるのである。「信仰と事業と云ふ問題は人も六カ敷云へ自分も六カ敷感じた 練習に依りて調和が取れば六カ敷事はない 来れ迄の忍耐問題だ 亟に実験に因り人の信が商業の基礎を為すと云ふ事を分ると事業を信仰の上に立つべき確信が付く……両者の共助共縁は堅く合体する之れが信仰と事業の合致点と信ずる」²⁴⁾ 堤林は、自らを「自己の練磨心と神の教育に因り精神上事業上爪哇学上人生学上撰ばれたる学生」²⁵⁾ と定義しているが、これからみると、かれはジャワで行うことの総体が、神意にかなう信仰のあるべき姿と意識していたのである。

このような基本的な使命観が内面的に確立していたことから、かれは、自らの行う経済行為において、終始強い自信を失うことはなかったし、また、経済活動のもたらす成果にたいして、いわば結果倫理的な一喜一憂を行う傾向をみせた。²⁶⁾ しかし、これらが、ひいては、堤林らの設立した南洋商会の繁栄を保証する決定的な条件にもなったのである。そして、そのことによって、堤林数衛と南洋商会関係者は、明治期初頭以降に南洋に渡った日本人としては画期的な存在となったわけであって、その意味ではかれらが持ち備えていた気風は、日本の「南方関与」の実質を本質的に転換させる契機ともなったのであった。²⁷⁾

そのこととの関連において、堤林におけるこのように信仰と一体化した経済行為について、あと二点だけ、具体的な問題点について触れておく必要がある。

その関連で、まず第一に注目すべきことは、堤林が、異様なほど規律を課することを好んだという事実である。

ジャワに渡ったあと、規律を文案化した最初の記録は、明治43年2月3日付の日記に見出すことができる。²⁸⁾

23) 前掲『苦心談』直筆原稿より。

24) 「時々の正記」第一号87ページ。なお、堤林は、行商のあい間に日本の雑誌を読んだが、「福音新報」を読むと同時に『実業之日本』と『太陽』を読んでいた証拠がある。

25) 同第三号52ページ。

26) 行商がうまく行かない時の心境が、次のように表現されていて、興味深い。「夜に入りて漸く二十七円とはなさない けれど奮闘の力は不満に遷り気分悪しき一層にして下らぬ事迄思い出し浅ましきは余が商会家族を凡て聖なる働に祝福を与へぬのか而も油汗で此く願ふのにと神を疑うに至る」 「時々の正記」第二号8ページ。

27) 矢野暢『南進の系譜』100ページ参照。

28) 「時々の正記」第一号19～21ページ。

- 「一、午前六時迄起七時迄礼拝食事私用一切を済す事
- 一、午前七時開店午後九時閉店正午一時半休息私の時間と定む
 - 一、行商者は労働多き為め午前八時半始業午後六時に終業以外は同様
 - 一、決議録は店則と同一の効を發す
 - 一、夜間終業後及休息中は可成有益に使用スル事
 - 一、業務中は階級を重じ命令を遵守スル事
 - 一、業務以外は凡て協同的にして上下なく真の兄弟たる誠情を表はす事
 - 一、自己の責任に尤も努力し公私の分を確守スル事
 - 一、教会教友家族友人の通信を勉むる事
 - 一、主任は規定の範圍に於て店務一切を指揮命令スル事
 - 一、會計は独立して店主直接の監督を受ける事但し金銭以外は主任の命を受くる事
 - 一、賞罰は最も公明正大にして何人と牟も許さざる事可成自己より進んで過失を申出る事
 - 一、毎月数回談話会を開き商会に対する意見を陳ぶる事
 - 一、可成集会を開き精神の修養信仰の向上を期する事
 - 一、如何なる理由あるも此地に退会を許さざる事必ず一度東京委員に歸す事
 - 一、商業成績不良の時は夜業を為す事
 - 一、店には容易に人を宿泊せしめざる事但協議の上許す事を得
 - 一、献金家族への送金は商会に対する義務なる事又貯金も一の義務なる事 義務一切を怠り浪費する時は退会せしむ
 - 一、品行不良品性下劣なる時も亦退会せしむ
 - 一、商業上の秘密を言外せざる事
 - 一、凡て正直を以テ精神となす事
 - 一、病気に罹らざる様注意スル事
 - 一、一ヶ月一度棚下し一^{週間}一度装飾を^変し毎日塵ヲ除ク事
 - 一、日常兄弟の実を現し虚心円開たる事」

この全24項よりなる服務規律は、この当時に海外進出した日本人としては異例の内容をもつものであったといえよう。とくに、「南方関与」の局面においてはまさに画期的といえ、その意味では、このような規律主義的な新しい類型の日本人進出を契機として、日本の「南方関与」の総体が本質的に変化するのであった。²⁹⁾ 堤林の明治42年における渡南は、その一つの決定的な契機として重要な意味をもったといえよう、

堤林は、徹底的なまでに規律主義を貫こうとした。ある日の日記には、次のような文章が読

29) 矢野暢『南進の系譜』94～100ページ参照。

みとれる。「自ら規律が足らざるが故人をも責むる能はず 屋内丸で書生屋の如く戦場の炊事場の如く珍らしき不規律なり 即ち衣類書籍一切の置場を作り炊事の方法を立て軍隊的に一切を律ス 自ら実行し之れ商業上の第一義なれば互の戦として此後之れを実行す 進んで此法店則を立犯すべからざる 自らの実行力を現さんと期せり 整理組織経済などの心は皆規律の感化なり」。³⁰⁾ この最後の一文すなわち「整理組織経済などの心は皆規律の感化なり」ということばに、従来の南洋在住日本人には欠けていた新しい近代的精神の発現を見ることができるのである。³¹⁾

そのことはともかく、堤林の規律好みは、当時の南洋の日本人社会では異例のことであっただけに、同行した青年たちも含め、周囲の日本人との摩擦の原因となった。

そのことによって、後にも述べるように、同行した青年たちとの不和对立も生じ、堤林の孤立感の原因が作られるのである。もっとも堤林は、このような規律主義とは別に、同じく近代的な人間関係の論理をも用意していたのである。その意味で、かれは決して前近代的な暴君タイプの人間ではなかった。堤林は、「主従観」と題して、次のような文章をある日の日記に書いている。「封建的主従観は人類を毒するものである。なればとて万人を一律にする社会主義も人類の発達と社会的生活を乱す 幸福なるが如くして不幸に落つるべし 共に神意天則にあらず 吾は撰ぶ神聖なる職業別である 人に上下の〇〇〇害を起さず平等にして忠実なるを要求するのである 使う人も使ふる人も天職で同労同格である……只人の上下は天意を行ふ程度に因り然と定まるものである」。³²⁾ このように、「天意の主従」(堤林の表現)を基軸として人間関係を捉えることによって、規律主義、すなわち「天意を行う」心掛けはますます厳格なものになり、それ相応に、結果的にはかれと周囲との人間関係はますます剣呑になるのであった。

ところで、もう一つの問題は、このような信仰に裏打ちされた経済行為が、堤林においてやがて「世俗化」とした場合、この「世俗化」の論理ないし契機をどう捉えたらいいのか、ということである。

堤林において、少なくとも初期には、そのようなかれのいわゆる「そろばんを以て無限の信仰の船に乗る」という行為は、いささかも論理的破綻をみせなかった。しかし、にもかかわらず、堤林の使命観の論理には、先天的にいくつかの「世俗化」すなわち宗教的使命観と経済行為との分離の契機が秘められていたのである。その事実、後にも述べる堤林の精神的「回心」との関連で、たいへん大きな意味をもつのである。

この点との関連で「時々の正記」第三号に書き留められた「余は事業を此く発達せん」とい

30) 「時々の正記」第二号27ページ。

31) 堤林の規律主義は、大正14年に編纂された南洋商会の『販売所百言』に結晶化するのである。ここには、百項目にわたって、南洋で働く商売人の心得がわかりやすく書いてある。これは、近代日本の経済倫理の一つのユニークな所産であるといえる。

32) 同第三号200ページ。

う一文は注目に値する。それを引用しておこう。

「余が事業理念の極致は絶大の支配力にあり 国家家庭の調和にあり 其達する道は好み需要供給を小売りに学び試験的開店を試て進路を設計し更に店員統御を修養して戦を開くにあり戦ふに於て生死を成敗に任じ精神精力を集中して……」。³³⁾ その中には、堤林の信仰即経済行為を導いたいくつかのライトモチーフが明白に登場している。その一つは、「支配力」というユニークな概念であり、これは、かれの「世俗化」ということと微妙に結びつく概念であったと考えられる。そしてもう一つ、次の章で分析することだが、「国家」の観念が先天的に指定されているところに堤林の宗教観の特徴がみられる。第三に、「戦」の概念は、その次に書かれてある「生死を成敗に任じ」という典型的な結果倫理のエトスと結合して、堤林の経済行為を無方向的なものに導きかねないモチーフであった。事実、このようなライトモチーフは、その後の人生の展開において、ある種の「世俗化」の契機として働くのである。しかし、ここでは、これ以上深入りしないでおこう。

ただもう一つ、堤林の宗教観の一面にかなり特異な面があった事実だけはここで指摘しておくことにしよう。それは、ある種の現世主義ともいうべき考え方で、人生の一回生起性に確信を抱き、それによって、いたって現世的に宗教観を構築する性癖である。たとえば、「靈魂不滅の懷疑」という文章に示されているような合理主義的とも唯物主義的ともいえる発想に、その性癖が如実に示されているといえよう。

「自分は靈魂不滅と云ふ事は各人の魂は其儘次の世又次と因果の摂理を以て神に統べられつゝ往くもので其限のものと云ふ意義で分て信じて居った 然るに

第一の懷疑は自分の靈魂は前代の証跡なく皆此世で集まった父母のもの先生のもの友人のもの味方のも敵のものあらゆる方面の人々及しんら万象から吸収し生長せしめたる事実である」³⁴⁾

いずれにしても、このように、ごく初期の堤林の思惟様式の中に、後年の「世俗化」の契機がひそんでいるのを読みとることができるのである。そのような契機は、とくにかれが自らの「純潔な動機」を対人関係の失敗から反省し始めたとき、そしてまた、かれが経済行為の局面での結果倫理にこだわり始めたとき、「世俗化」をうながすものとして活性化するのであった。

ところで、もう一つ、重要な課題が残っている。それは、堤林は、経済行為と伝道ということとを結びつけていたのかどうか、という点の確認である。そして、この点は、堤林一行の渡南の目的とも関係することである。初期の頃の「時々の正記」を検討すると、一箇所だけ伝道について言及したところがある。そこには、こう書いてある。

「今夜英国の老人が先年妻を失ひ今は二人の妾にやけ酒のみ呑んで居ると云ものに伝道を諫

33) 同第三号115ページ。

34) 同第三号64ページ。

む 昨夜も川澄君に伝道す」³⁵⁾ (明治43年11月13日付)。

この一文から明らかに読みとれることは、堤林が「伝道」という課題を行商のあいまに意識かつ実践していた事実である。そのことは、ほぼ間違いないところであろう。

この点にはこれ以上深入りしないことにして、ここで観点を変えて、堤林の信仰の哲学を特徴づけていたある特殊な価値意識について検討しておくことにしたい。

堤林の信仰の実践的側面でもっとも重要なライトモチーフであったと思われるのは、「愛」という概念であった。この言葉を、堤林は、かれなりの特殊な感慨をこめて頻用している (神への愛、他人への愛など)。その内容はともかく、かれの「愛」の実践については、検討に値する二つのだいじなポイントがあった。それは、一つには、「愛」の及ぶ対象群であり、もう一つは、「愛」のあかしとしての禁欲であった。

「愛」の対象として、堤林は、かならずしも無限抱擁的に不特定多数の人間を考えたのではなく、逆に、厳密なほど自分の「愛」の及ぶ範囲を範疇化しようとした形跡がある。そして、そこで創られたいくつかの範疇は、微妙な序列を与えられていた。序列の第一位に来るのは、「妻」という概念であり、それに続いては「家族」という概念であった。堤林にとって、「妻」は特別な存在であったようで、「時々の正記」の記述の中に占める「妻」への語り掛けの度



写真6 明治40年頃、妻きよと一緒に。堤林は、この写真をもってジャワに渡り、肌身はなさず持って歩いた。



写真7 堤林数衛とその母

35) 「時々の正記」第三号87ページ。

合、その表現は、異様なほどである。³⁶⁾「妻に対し欺なき愛高潔なる愛情が働いて止まず」（明治43年1月28日付）。³⁷⁾「人生真面目なる恋愛とは今の自分が妻に設ける心だと思う 自分も恋愛と云ふ事は清子に因て初めて出来た 其力は余の性格に変化を来した様だ」（同年2月4日付）。³⁸⁾

「家族」の範疇では、「母」がある意味で「妻」以上の序列を占めている。堤林による「母」の定義は、「我が母は神を信ぜぬ以前の救主である 吾が善正義などの綱は皆母が無言の実行誠意中の誠意が手にして居たのである 母には昔も今も感謝する 之れに対し自分の尽したる事は信仰に幾分導きたる事のみ」（明治43年3月3日付）³⁹⁾ という捉え方になっている。「母」についての表現をもう一つだけ拾っておく。「母は我を産みたり 我が母は肉よりも心の生命を産みたるなり 余の真面目、熱性、勉強、愛などは皆母は与へて我れ多くは完せざるなり 母は信仰生活前の救世主なり 恐くは真の救世主に至りたるも自然に母が導きなる如く思ふ」（同年3月21日付）。⁴⁰⁾

これにたいして、不思議なことに「父」についての言及は皆無に等しい。

「家族」の次の序列に来るのは「親族」であった。堤林は、「親族観を書いて置く」と題されたある日の記録の中で、次のように書いている。「親族は字の如く親むべき族なり 他人よりも言へ難き忠告を為し愛助の一步として尽すべく又客観の歴史を装子孫の感化に善果を祈る近き同労者として一部の苦楽を共通するものなり」（同年3月17日付）。⁴¹⁾

この日の記録の翌日に、堤林は、こんどは「友垣観」と題する文章を書きつけている。これは、論理的にあって、「親族」の次に置かれるべき「愛」の対象であった。かれはこう書いている。「友垣は種々の原因場合に依って結ばるる世路の同行者なり同労者なり 自ら結べる親族なり 其十年五十年なると又百年永遠なるとはあれと其間は利害榮辱生死は共通なり 飲食



写真8 大正初めの家族全員での記念写真。妻きよと数馬、謙受。

36) 堤林は、明治40年に、新庄の呉服屋高山家の娘きよ（清子）と結婚している。従って「時々の正記」に登場する妻はすべてこのきよ（清子）のことである。堤林三郎氏の談話によると、この時の結婚は堤林数衛としては三回目のもので、最初および二番目の妻とのあいだには、それぞれ一女をもうけたという。きよ（清子）は初婚であったが、たいそうわがままな女性であって、数衛を終生相当に手こずらせたという。

37) 「時々の正記」第一号10ページ。

38) 同24ページ。

39) 同37ページ。

40) 同96ページ。

41) 同88ページ。

舞踏の如き条件の交換は友と云ふに足らず会すのみ 労苦共通なき友は親しき味を分らず同一の喜びなし」(同年3月18日付)。⁴²⁾

ところで、「愛」の対象の文脈において、堤林には、特殊な関係ともいべきいくつかの人間関係があり、これをかれは、まったく特別の位置において考えた。具体的にいうと、一つは、東京の教会関係者であり、中でも「先生」(植村正久、南某ら)と「教兄」(船尾栄太郎ら)は、精神生活の依り所として特別な地位を占めた。そして、いま一つ、かれが「兄弟」と呼んだ例の15人の渡南同行者が特別の範疇としてあった。⁴³⁾

この15人の「兄弟」と自分との関係について、堤林は、日記のある箇所ですべて述べている。「諸兄よ 余は神の前に諸兄を愛すと公言するものに有るべく其高き神意より起ると又低き自己より起るとの二種こそあれ等しく諸兄の心身に障害を含まざる一助者なることを許されよ なれば事業神前に報告なす迄は一隊の道者にして其一員を失ふは一枝を切らるる苦痛に有るべく……此意義に於て余の温情を願はんよりは一層諸兄間の温愛濃密調和を願へ望むものなり」(同年3月4日付)。⁴⁴⁾ この記述からは、明らかに、15人と堤林との関係が必ずしも調和を保ったものでなかったこと、それと同時に15人の内部関係も調和を失ったものであったことがしのばれるが、事実その通りであった。

堤林数衛のスマラン滞在の最初の3、4年間で、もっともかれを悩ませたのは、その15人の渡南同行者との人間関係を円滑に保つことであった。あるいは、かれの人生でもっとも困難な局面がここにあったともいえる。堤林と共にジャワに渡った15名の青年との初期の関係について、後年、次のように回顧している。「元々此等青年は出発に当りて唯外国と云ふ事に憧憬れた好奇心から飛び出した軽率者もあり、中には之を利用し様と云ふ黒い野心のものもあり、或は彼地周囲の墮落者よりの誘惑に罹ったものもあり、殊に其当時彼地在住の日本人の多くシンガポール辺より落つ流れた遊惰者であって、唯々日露戦争の夢の様な一時的日本人気を乱用し、土人支那人にもてるに安心して其の日を送ると云ふ何等の考えも無き人のみで、元より、将来などを計る者は殆んど絶無で、此等の輩は常に暴慢と誘惑と墮落を新来の青年に力めたのであります」。⁴⁵⁾ この大正7年段階の記述が正しかったことは、明治43、4年頃の日記の記述からも裏付けることができる。

なかでも、明治43年夏、疑似コレラにかかって死を覚悟した堤林が書いた同年8月13日付の注目すべき遺書には、当時の15人との人間関係についての所感がはっきりと書かれている。「小林、武雄及び大関の死者に対し商会は忘る事なく商会の義基礎進むに従って現実に尽

42) 同91ページ。

43) かれは「時々の正記」の中では、15人のことを語るとき、かならず「原田兄」「三浦兄」と「兄」づけで書いている。

44) 同103～104ページ。

45) 『南洋商会創立拾年之苦心談』(直筆手記)より。

くすべし、三浦、坂本両君に対しては予は充分に之を導く力なかりし事遺憾とせると共に多少青年の意気の冷静なる能はざる事を遺憾とす、然れども予は年月と共に其の一致を期待したるものなり 此の意味に於て両者に対し商会は長々手を携へられん事を祈る」。⁴⁶⁾ この当時、堤林は、15人の「兄弟」の中から3人の死者を出していたほか、少なくとも5人のものと感情的対立関係を来たし、その5人の内2人は帰国し、教会関係者に堤林のことを密告ざん言している。⁴⁷⁾

以上のような「愛」の対象となるべき人間範疇を検討してみると、堤林が「愛」をごく観念的、心情倫理的に考えていたことがわかると同時に、「愛」の及ぶ範囲、逆に見るとかれの「愛」に応えるべき範囲が局限されており、またその局限された人間関係においてもかれの「愛」の論理の特異性の故に摩擦が絶えなかったことがわかる。すなわち、堤林は、少なくともジャワ滞在の初期においてはたいそう孤独であった。

ところで、かれの「愛」にまつわるもう一つの重要な側面として、ストイシズムの傾向を見てもおかねばならない。堤林において、禁欲は絶対の課題であり、具体的にいえば、女と酒がその禁欲の対象として強く意識されていた。「此夜三人の売春婦は室内に入り来る余厳然たる体度彼等意外に見へてきまり悪しく用もなき売物して帰りたるぞ笑止なり 此宿付の売春婦ある昨夜も今夜も平気で孤眠す温しく神キリスト妻来りて楽しむ何たる幸ぞや信仰の感謝が此処にある」(明治43年2月16日付)。⁴⁸⁾ 「数日来祈りが出来て女の姿は人間と見ゆるのみにて男女を分けない 妻の前に何時も此くありたし」(同年2月22日付)。⁴⁹⁾

このような禁欲の実践は、次のような確信によって貫かれていたといえる。「神に対する罪の意義と妻を愛する貞節心より守る夜の意義は深く可成防禦を固くし様と云ふ心は怠らぬ なれば内外共にクリスチャンを表言し各所に可成多数の学督者を作り罪の習慣悪魔の窺に落ちぬ様にし……」。⁵⁰⁾

酒についての禁欲も厳格に意識されていたようである。その理由について必ず言い訳がましいことを書き留めている。「此日余りに腹立小杯に一つ酒を呑みたり、嗚呼恐ろしき酒なりし而も喜びの為めならず 止むなき典礼の酒にもあらず 又好む酒にもあらず俗に云ふやけ酒に

46) 「時々の正記」第三号21ページ。

47) 堤林との関係を悪化させた5人とは、長谷、阿(安)部、富増、坂本、三浦であり、この内前二者は帰国する形で堤林との関係を断っている。堤林は、坂本、三浦について「亡びつつある三浦、坂本」と書き、さらに三浦については「世辭の巧になりし事酒を呑む事大言壯図を軽く話す事信仰の落ち行く様見へて之を悲しむ」と書いている。富増については「先日の言行相違を責め、且つ同志を偽るの罪を説諭し、真の一致に達せず」と書いている。帰国した長谷、阿(安)部については、それぞれ「恐るべき家庭の悪感化に人を疑い親しまず」「俗信俗愛輕薄巧言令色」と書いている。けっきょく、堤林と、南洋商会で終生事業を共にするのは、その15人の内、林省三、原田薫二の2人だけとなるのである。

48) 「時々の正記」第一号43ページ。

49) 同54ページ。

50) 同第三号107ページより。

て全く売れぬまま働く処に悪鬼が一杯飲ませたり 我は弱し我は罪を犯せり」。⁵¹⁾

以上述べるように、堤林において、「愛」という概念は重要な意味をもち、とくに「愛」の及ぶ対象とそのあかしとしての禁欲主義の実践という点で、ユニークな傾向に伴われていた。このような「愛」の観念と実践とが、かれの信仰の中で相当な比重を占めると同時に、その信仰と表裏一体をなした経済行為と微妙に交錯するのである。すなわち、「愛」の対象の指定において、堤林が必ずしも普遍主義的な立場をとりえず、自己を中心とする同心円を描きながらも、「愛」の対象を特定化し、しかもそこに序列をつけたために、「愛」の円周は無限にひろがらず、けっきょくかれとはいかなる形であれ結びつかない人間類型の生ずる余地を残した点は重大であった。この点は、以下に述べるかれの「南進論」への傾斜との関連で、ひじょうに大きな意味をもつようにも思われる。

Ⅲ 「南進論」への自己発展

堤林数衛の精神的「回心」について、いま一つ注目すべき局面は、かれが日本と南洋との関係をどう捉えたか、ということである。

たしかに、少なくともジャワ生活の初期においては、かれは厳格主義的なキリスト者として、自己の練磨および主体的実践に関心をしばって生きていた。そして、その場合のかれの宗教観は、以上に描いた通りのものであった。しかし、そのような主体的な姿勢は、その後むしろかれの人生の目に見えない基底部に埋没してゆき、表面的、外的な処生行動の面にはまったく違った様相が現われてくる。つまり、絶えず日本人の使命を意識し、日本と南洋との関係改善を考え、そして結果的には一種の「南進論」者の典型を演ずるに至る、という変貌である。

これが初期のキリスト者としてのあり方からの論理的逸脱であったか、それともかれの経済行為の論理的発展であったか、については見方がわかれるところであろう。事実、日本のキリスト教徒の中には、堤林が師事した植村正久が典型的な代表としてあげられるように、「日本の使命」を強く説く者は少なくなかった。その植村は、日清戦争の勃発に際して、これを「今回の戦争は日本帝国が開進的天職を自ら意識し、之を全世界に披露するの機会」と捉え、いわゆる「義戦」論を展開してみせた。⁵²⁾ 堤林が、このような国家にも「天職」を認める植村の感覚の影響を受けていたという見方もなりたつかもしい。あるいは、そこまで結びつけなくとも、信仰的使命としての経済行為を規模的に拡大し、その効率化を考えていった、その論理的帰結が「南進論」であったという判断もなりたたないわけではない。

いずれにしても、ほとんど終生、神の信仰と同時併行して、「南進論」者であり続けるのであり、それだけに堤林におけるこのような変貌の局面はひじょうにだいじな問題を投げかける

51) 同第二号8ページ。

52) 植村正久「日清戦争を戦争問題とせよ」『植村正久全集』第六巻所載。

のである。

ところで、堤林の「南進論」者的活躍は、大正11年をピークとしている。この年、かれは南洋全域を視察しており、そのあとで日本に帰国して各地で講演を重ねただけでなく、いくつかの雑誌に、日本の南洋への進出を説く評論を書いている。その頃の代表的な作品としては、「平和的国策としての南洋発展」(『太陽』大正11年12月号所載)、「南洋発展論」(『有終』同年第9巻第12号、12月5日発行。これは、海軍のあるクラブでの講演記録と思われる)、「南洋貿易対日本工業」(『日本之開門』同年12月号)、「前途益々有望なる南洋新発展地に要求する青年と有利事業」(『実業之日本』第25巻第12号、同年12月号)などをあげることができる。

なかでも、『太陽』誌に掲載されたものは、もっとも体系的な南洋進出論であり、文章表現もよく練られていて、堤林としても自信作であったようである。⁵³⁾

緒言を除くと、全体は7章よりなり、その内容は、1. 南洋の真価、2. 日本人発展の状況と貿易の現状、3. 南洋貿易発展に必須なる日本移民、4. 南洋工業の発展に必須なる日本移民、5. 有利なる南洋土地事業の投資、6. 金融機関整備の急要、7. 以上実行の可能性、となっている。

ただ、ここでは堤林の「南進論」の内容を紹介することは避け、もう一つのもっと重要な問題を説き明かすことにしよう。

まず、この論文の緒言の中には、この当時の堤林の意気込みがみごとに語られている。「余は明治31年以来南洋生活を為し、最近15年間南洋商会と云ふ貿易業を興し31ヶ所に店舗を置き、目下130余名の青年を率いて之に従事しつゝあり。傍ら椰子園、規那園等を経営し、尚ほ南洋倉庫株式会社の重役、華南銀行の相談役、並に我が政府筋よりの各般に亘る南洋方面の囑託等を致して、現に南洋を本拠として専ら事業を営んでをるのであつて、余の経営する椰子山には、その高处を『一望台』と名づけ、そこに自分の墓所迄も造つて、何処で死んでもそこへ埋めることに決めてある位で、一生南洋に終始する考で居る。従つて南洋以外の事には何にも関係しない。そう云ふ立場に在つて、日本と南洋とを結びつけて、右の二問題即ち日本の人口過剰問題、及び貿易不振の問題を平和的に解決することの可能なることを、実験上より深き確信を以て立証せんとするのである」。

当初は真摯なキリスト者として、いわば国策とはま



写真9 ある段階の南洋商会

53) かれは、これの別刷りを作り、表紙をつけ、「新南洋発展策」と題して、知人に配った形跡がある。

まったく無関係にジャワに渡った筈の堤林数衛は、ここでは、あまりにも典型的な「南進論」者に変貌している。ここには、事業成功者としての誇らしげな自己称揚と並んで、「政府筋との関係」という一種の名誉についての付言もあり、そして「一生南洋に終始する考」という使命観がこの上なくはっきりと語られている。この限りにおいては、大正11年当時の堤林は、あまりにもありふれた南方関与日本人でしかない。

明治42、3年の孤独なキリスト者としての初心からわずか13、4年後に見られるこの平凡な人間像への変貌は、突然変異的に生じたものだろうか。必ずしもそうではない。明治43年当時の、すなわちまだ純粋な事業即信仰というプロテスタンティズム的倫理を実践していた当時の堤林の思惟様式の中に、後世のかれの処世観、世界観につながる要素がそもそも秘められていたと考えたほうが正しいであろう。その仮説を、「時々の正記」に素材をとって実証していってみよう。

ジャワに定着した堤林数衛の自意識および対他意識を分析すると、かれがやはり、ごく自然な意識として、自らを「日本人」と意識し、周囲の人間を他民族と捉えていたことがはっきりする。これは、堤林において、神對自己という従来からの意識と、いささかも矛盾抵触しないもののようであった。しかし、その結果、かれの自意識、対他意識ないし外界認識には、ユニークな認識の構造が結果することになる。

まず、堤林において、自らを「日本人」として意識し、それ相応に「日本」を意識する傾向はごく初期の頃から顕著にみられた。これは、行商の体験を通じて、比較的短時日のうちに結晶化した自意識であったと考えられる。たとえば、明治43年2月4日付の日記には、次のような文章がある。「行商に出て支那人に店前乞食を追い払ふが如く意地悪しき面想と口汚なき言葉にて云ひ放さるる時、土人に迄劣等視せらるる時、苦力に責めらるる時、売れない時、……第一に心に起るは我は一等国民である 殊い物質にも人並に暮し得る資格がある 我れに最愛無二の妻がある 我に一人前の智慧がある 而して何の為め此処に忍ばなければならぬ……」。⁵⁴⁾

ここにはっきり出ている「一等国民」という自意識は、この当時の日本人一般に特徴的なものであったとはいえ、堤林においても、いわば条件反射的に出てきている事実は注目に値する。そして、同じ4日付の日記の中には、「神よ我が国を一層真面目にし賜へ、……真理を問はんとして能はざるあわれなる国民を恵み賜へ」という記述もあり、かれの「国」意識、「国民」



写真10 大正期、南洋商會が軌道に乗り始め、もっとも順調な時代の堤林数衛。

54) 「時々の正記」第一号22ページ。

意識がここにかげっている。

このような、「日本」および「日本人」をアプリオリの所与のものとして認める堤林にとって、いまの日記からも読みとれるように、「外国人」を「日本人」とは別個の存在、それも、共有できる要素をもたない異質な存在として捉える傾向もごく自然なことであった。「日本人」に対比さるべき存在として異国民、異民族を措定する習慣は、堤林の終世変わらぬ特徴であった。これは、前節に述べた「愛」の論理の特性とも無関係ではないかもしれない。そのことはともかく、ただその場合、堤林が措定する外国人の諸範疇には、常に一定の組み合わせのパターンがあった。それは、支那人、印度人、欧米人、という組み合わせであった。そして、後に述べるように、このほかに「土人」という概念があった。この組み合わせは、ジャワに渡った直後のごく初期の頃に形成され、その後ほとんど修正を加えられないまま、堤林流の「南進論」的発想の中に、だいたいの前提として組み込まれることになる。

堤林の見方では、このような外国人は、基本的には競争相手であった。「自己の競争者たるべき彼地の優者即ち外来の欧米人・支那人・印度人等につき調査深慮を巡らし、之を尽してこそ始めて事業建設の用意が徹底し堅い決心が定まる次第で、此三者に打勝つ丈けの計画決心を定め……」。⁵⁵⁾なかでも、堤林がことのほか重視したのは「支那人」であった。かれは、「支那人」にたいしては、絶えず一目置き続けた。「其の力は支那人が分限を守るに強き心で、即ち身分に相応した処の生活を為すと云ふ事です。之が凡ての事業をなし、又一家を経営するにも最も正確なる予算となって而も之れを守るには何物をも犠牲とする決死的とも云ひ得る程に先天的に堅い精神がある。……苦力より行商、行商より小売商となり、夫れより卸商、産物土地の栽培耕作と云ふ様な順序で、遂に今日では世界的大商人が沢山あります」。⁵⁶⁾堤林は、これを「支那人主義の成功」という表現で捉え、自分自身の辿った人生のパターンとの類似性を指摘している。

「印度人」についても評価は低くない。「約言して申せば個人の力を一大協同力として、互に気脈を通じ助勢し合ふと云ふ最も良い組織となって居る」⁵⁷⁾と、組織論的な観点から高い評価を下している。「欧米人」についても、「商業的基礎機関とも云ふべき銀行、船舶、倉庫、保険と云ふ様な文明的設備機関を利用し、又其知識に於ても世界的に科学的に優秀なる事は勿論……、商品に正札を付け正確なる値段を表はし、品質に於ても偽らず凡て正直に説明し、女、子供と雖も安心して買ひ得るやうにし、……」⁵⁸⁾と高い評価を下している。このように、堤林の「外国人」観は、単純に競争相手として捉えるだけでなく、主として相手の長所を正確に捉えるよう心掛けるという特徴があった。そして、注目すべきことに、かれの「外国人」観は、

55) 前掲『南洋商会創立拾年之苦心談』6ページ。

56) 同6～7ページ。もっとも、堤林は本国および台湾の「支那人」と「爪哇の支那人」とをわけて考えたようでもあり、前者にたいしてのほうが評価は高い。「時々」の正記」第三号11ページ参照。

57) 同8ページ。

58) 同9ページ。

奇妙な具合に「日本人」論に接合するのである。「此三人種の長所を兼ね備ふることの出来る者は独り日本人であって、即ち明治維新以来各般の進歩は欧米人の長所を採り生活経済の点に於ては支那人の長所に準ひ又組織に於ても印度人の長所を学び得らると云ふ素質を吾々か持つて居る……」。⁵⁹⁾

ところで、もう一つ、だいじな問題がある。堤林は、このかれのいう「三人種」以外の存在、ほかならぬ蘭印現地の人びとをどう見ていたのであろうか。堤林が、それを「土人」という表現で捉えようとしたことは既に示唆した通りである。堤林の「土人」観をかいま見る前に、キリスト者としてのかれが、他の宗教をどう見ていたかを知っておかなければならない。

この点、堤林のユニークな特徴は、異教徒の信仰にたいする極端なまでの無関心ないし蔑視である。かれは、人間と宗教の関係が多能的に存在しうるという可能性にたいしては、まったく無感覚であった。

「時々の正記」には、ごく稀れに「回々教」についての記述があるが、イスラムは、堤林にとって、あたかも土俗風俗でしかないようであった。「ジャワでアラブと云ふ回々教徒は中上流を占め居る 婦人が出る時は必ず眼を出して布をかむる これは男女の間違を防ぐが第一の目的である 面を見れば男子に色情を起させ色々の事件起る 之れを発せざる為し^{じゅ}美の判別付かぬ様にしてある 此くなりたる因は大小種々あろうが兎に角無智の民には一面の良習であつて一面には不健全の国民を表わして居る」。⁶⁰⁾

堤林が、南洋の宗教について、もっと直截な表現を用いて批判をなしたことは、時折日本に帰国した折におこなった講演記録でそうと確認することができる。たとえば、大正11年10月11日、京都の立命館大学でおこなった「南洋の真価」と題する講演の中で、次のようなことを語っている。「シャム、ビルマは仏教であるが、今や残るは只形骸ばかり、土人は極端な迷信に陥り、僧侶は無為徒食、安逸放恣飽くなき生活をして居る 土人は人らしい生活もしないで収入の殆んど総てを僧侶及寺院に捧げる 犬小屋の様な家に起居しながら、わずかに生命を支ふる以外は収入を挙げて寺に運ぶ、寺院を金箔で塗り、僧侶に放縦な生活をさせる為に、全家族を犠牲に供しながら、我れ来世に極楽を得べしと自ら慰め安んじてゐる、彼等の向上発展せざる理由の一は実に此迷信にある」。⁶¹⁾ このように、南方上座部仏教、そしてイスラムを「迷信」と捉えるのが、堤林の終世変わらぬ考え方であった。

そのような堤林において、「土人」という概念はむしろ積極的な意味をもった。かれは、明治40年3月3日付の日記に、「爪亜人の恵を疑う」⁶²⁾ という見出しを付け、次のように書いている。

59) 同10ページ。

60) 「時々の正記」第三号89ページ。

61) 「京都日の出新聞」大正11年10月13日付所載講演内容抄約より。

62) 「時々の正記」第一号71ページ、なお堤林はジャワをこの当時「爪亜」と表記した。

「爪亜人は物質眼を以て見れば賤衣粗食裸足茅屋世に云土人である 政治眼を以て見れば保護に甘んず閑せずエンである 而し民衆は可驚上長に畏敬服従の信念が強い 精神的に見れば争闘を好まず沈静の〇〇を尊び言語動作をカリソメにせず……而して人倫の大義なる男女間に至りては極端なる動物性機会性を現はし原罪を感じぬ純然たる不具民である」。このように「爪亜人」を捉えた堤林は、「土人」という表現を「恵なき未開の民」の意で日常的に頻用した。そして、日記類を見る限り、「土人」ないし「爪亜人」に関する記録は、このような例外的な場合を除くと、ほとんど見当たらない。すなわち、「土人」概念は、いったん固定化したら二度と揺がない一つの先入観として、かれの意識に定着したのである。

ところが、かれが「土人」というとき、それは基本的にはマレー語族全般を指したようだが、問題はその中には、マレー半島および蘭領東インドに住む「土着民」⁶³⁾だけでなく、もっと広い層が含まれていたという事実である。⁶⁴⁾ 堤林は、いずれにしてもこの地域における人種区分には無とん着であったようで、各地で出会う各種の人種をすべて「土人」ないし「マレー人」で捉えている。

このような「土人」としての「マレー人」観は、堤林個人の「南進論」的発想において、すこぶる重要な役割を果たすのである。

「南洋マレー人は第一人間が競争者として劣弱であり、其処に将来日本人発展の余地がある。……土地が広く、物産が豊富で、人間が支那人よりも訓練なく、商工業者としての要素を欠いて居る。即ちこゝが日本人に取つて最も有益なる点であり、又将来支那よりも望の有る点である」。⁶⁵⁾

このように、「マレー人」地域は、「日本人に取つて最も有望なる」地域としてごく自然に指定され、ここに、一つの堤林なりの「南進論」が胚胎するわけである。いずれにしても、堤林が日本人の南洋進出を語るとき、その進出の舞台は、「マレー種族」が住むとかれが考えたかなり広い範囲がそれとして想定されたのである。

この点に関連して、堤林の発想の中に見られる「南進論」的な傾向の発想のもう一つとして、日本文化的な要素を現地の風俗の中に発見して、南方文化と日本文化との近似性ないし同一性を実証しようとする嗜好を見落とすことはできない。

堤林の端的な表現のいくつかを「時々の正記」から引用しておこう。

「日本古代男女の笠と爪亜の笠は形同一なり」

「爪亜の槍は日本の槍に同一形質なり」

63) これも堤林のもう一つの語法。

64) 『日本之開門』大正11年12月号9ページには、次のような一文が発見できる。「南洋となればマニラ、蘭領印度（ジャワ、スマトラ、セレベス、ボルネオ）マレー半島、暹羅、仏領印度、緬甸、此辺は大體マレー種族であり……」。

65) 前掲『日本之開門』大正11年12月号10ページ。

「武士の行列は支那式にあらず爪亜と同一なり」

「支那の帯劔は西洋と同じく腰に下げ日本爪亜は帯に差し同一なり」

「爪亜土人の掛声（荷積等の時）日本の掛け声と（船積の掛声）と同じ」

「古代家屋の日本の窓，爪亜の現在と同じ」

「日本の和鋏と云ふ鋏は爪亜の者^{ママ}と同一」

「日本の楽器つづみと同一様のものあり」

「神武天皇天照皇太神の飾り生蕃尊長爪亜の正装首飾り等同種なり」

「爪亜の機^{ヘギ}は日本と同一なり」

このような日記の各所に記述された所感は、注目すべきことに、いずれも「同一なり」という断定的な表現が用いられている。これは、いうまでもなく、直観的、印象論的判断ではあっても、このような直観を働かせるのは「南進論」者の共通の特徴なのである。

いずれにしても、このようなかれの自意識および「外国人」観を総合的にあわせ考えてみると、比較的早い段階で、堤林が「日本の使命」について問題意識を抱き、そしてそれを心中で発展させていったことが容易に理解できるのである。そして、それが、究極的には、大正10年代に花咲く堤林流の「南進論」につながり、それと同時に、キリスト者としての内省的、孤立的姿勢を弱め、「日本」といういま一つの価値的存在に自らを結びつけていく世俗的姿勢に流れたことにもつながっていくのである。

堤林の「日本の使命」論は、明治43年3月4日付の日記に、その萌芽的な原型を求めることができる。スラバヤ滞在中に書かれたとおぼしいこの箇所は、「日本人発展策」と題されている。

「爪亜に発展を画するものは 先日露戦勝時代の変幻の夢を破れ 自己の能力を覚え 爪亜事業の階級を評○せよ 支那人発達歴史及現在の支那人を明かにせよ 支那人の政治上より余議なく退歩せられたる事実を験せよ 欧州人の爪亜政策に用いられ又与へられ居る点を験せよ 爪亜は世界有数の平安地にして又無比の良島民たる事を忘るるな 欧州よりも割善く成功し得らるる 欧州人即和本国人を法律にて保護しある事 日本人は○中に幸しある事 又表面排せきもせず少数の利益は与えるに○○○○さる事を知れ 事業は土人と爪亜あるべきを忘るるな（中略）

日本人は先づ支那人禁制地の和蘭人の悪感と競争なき程度に開店し爪亜及土人と自然の結付き地盤出来たる時に商業上欧人と争ふべし 此べしの一言あるのみ」。⁶⁶⁾

この段階では、たとえ「日本人発展策」と題されてあったとしても、「日本人」には堤林個人が擬して考えられていた度合が強く、その意味では、日本人全般の国策的使命という意味での「南進論」的体系性はまだみられない。それにしても、厳格なキリスト者であったこの段階

66) 「時々の正記」第二号13ページ。

の堤林が、経済行為の戦術的展開を考える過程で、ごく自然に「日本」ないし「日本人」の使命を意識し出していた事実は興味深い。同じ「時々の正記」の明治44年2月1日の日記には、「今は日本の過渡期なるは申迄もなし 而して外形の事は姿も余程に慣れて欧州風の準序位は行恒りたる感あり……当代の準序と進歩を追へるなり 此の世に何事を為すにも自分の日本人の位置を忘れてはならぬと共昔の日本人を失ふてはならぬ……昔の日本人より一倍勝りたるものが此の過渡期研究の時代に産るべき時なる……」⁶⁷⁾ という注目すべき偶感が書かれている。ここでの「過渡期」という表現には、遠からぬ将来、大なる使命に目覚めてなにかをなす日本、という堤林の初期における潜在意識がこめられていたと捉えたら、読み過ぎだろうか。それが読み過ぎではないと思える証拠には、その日記のすぐ後の箇所に、日本について、「又の世を支配すべき胎産時である 見渡す限りまだ見へぬが 日本の時勢が何となく受胎した様の趣きがありて嬉しい」という文章が続いている。

なにはともあれ、「神」を強く意識した堤林数衛が、それと同時に、そしてそれと同じ程の緊急性とともに、「日本」ということを強く意識していたことはまちがいない事実のようである。ただ、堤林の「南進論」への傾斜が、信仰の希薄化ないし経済行為と宗教的エトスとの分離であったか、それとも信仰と合致した経済行為の論理的発展であったかどうかは、はっきりとは断定しにくい問題である。しかし、少なくとも、かれの残した文章から判断する限り、堤林は、宗教的信仰の上に「南進論」的発想を築いていっており、信仰の希薄化の形跡はないのである。

いずれにせよ、先程も指摘したように、堤林は、大正10年までには、一種の「南進論」者になっている。昭和10年12月31日付の日記には、次のような注目すべき記述がある。

「南進政策で多く積極の運動に出て名実の進境を見たり 誠意の勝利を味へたり 智も眼界も広げたり 爪哇の堤林が南洋の堤林となれり一般に異論なきに至る」⁶⁸⁾

堤林の「南進論」的関心は、大正期だけに限られず、その後昭和期に入っても続き、そして、昭和8年春に執筆されたといわれる「国策南進論」で、もっとも最終的な形での完成をみるのである。⁶⁹⁾ この「国策南進論」には、ごく初期の頃に胚胎された関心の類型が、そのまま強化拡大された形で盛り込まれている。たとえば、南方の言語、風俗、習慣等が日本と共通しているという事実が、一つの重要な理論的根拠として強調されている。

「南洋進出は国家なき奴隷の同民族を救ひ、帝国永遠の基礎を確立し東洋列国の平和を永久に保ち以て世界全人類は平等なりとの大義を明かにせんとするものにて帝国にとって百益ありて一害なき実に大義名分ある政策なれば、すでに日清日露の二大犠牲を正義のために敢行せる日本帝国が今また世界を対手とするこの大国難に遭遇せることは恰も日本をして亜細亜十億の

67) 同第三号184ページ。

68) 大正10年「当用日記」376ページより。

69) 大政翼賛会山形県支部『堤林数衛』pp. 81～参照。



写真11 大正7年当時，二人の子供（第三子，第四子）と。



写真12 南洋商会解散当時，晩年の堤林数衛。

生霊を救はしめんとする神意の大試練として，開闢以来の大使命なれば，あくまで大義に則り不動不迷，決然立つてこの大事業に任ずることは正に皇祖建国の御精神であり又明治大帝の御理想に忠なる所以と信ずるのである」。⁷⁰⁾

初期のキリスト者堤林数衛の面影は，もはやここには痕跡すらないといえる。しかし，いずれにせよ，これが，堤林数衛が到達した究極的な境地であった。

お わ り に

堤林数衛は，昭和13年1月23日，小笠原島で死んだ。病死であった。病気は咽喉ガン，享年66歳であった。南洋に墓地まで作り，「南洋に終始する考」を貫く予定であった堤林が，日本で死んだのは，いささか皮肉であった。

むろん，堤林数衛の全生涯を描くのがここでの課題ではない。ただ，こういう点だけは指摘しておいていいだろう。

堤林は，あるいは，一つの信仰体系から別のものへと「回心」を重ねる人生を送ったのかもしれない。明治41年にキリスト教に入信したかれは，大正期には，みごとな「南進論」者に転身している。ひじょうに「直感の働く人であった」⁷¹⁾ といふかれは，昭和2年という異様に早い段階で太平洋戦争の勃発を予言し，東京の自宅の者に「防空壕を掘らせた」⁷²⁾ といふ。晩年

70) 同書85ページの引用から。残念ながら，この「国策南進論」の原稿はどこにもみあたらない。

71) 堤林三郎氏の談話より。

72) 同上。

の堤林は、南洋商会が昭和3年に解散に追い込まれたということもあり、「南進論」を忘れ、もっぱら日本にいて、しかも禅にこり、曹洞宗大本山鶴見総持寺をよく訪れたという。かれの戒名も、この寺からもらっている。

昭和3年、南洋商会の解散に際して、かれが現地の関係者に語った最後の挨拶の中には、「常に祖国の光輝ある二千六百年の歴史を研究し、神聖なる国体と皇室の尊厳に絶対の信仰をさしげ、つとめて内地の親族友人と通信をせられたい」という一節がある。「諸君、大愛国心を以て進みたまえ」という呼びかけもある。このような昭和3年段階の堤林とジャワに渡った当時のかれとに、連続性ないし思想の一貫性を求めることは表面的にはいささか困難である。そこに「通信」ということが出てくるのが、いかにもかれらしいといえぬことはない。しかし、ただそれだけである。

堤林数衛は、たしかに南洋に渡った日本人としては、例外的ともいえるほどユニークな自我の構造の持ち主であった。そして、かれは精神的な世界に生きたという意味でも、例外的な存在であった。しかし、かれは、このような幾度となく特殊日本人的な「回心」を重ねた軌跡を描いてみせている。そして、結果的には、日本の「南進」を基底から支える重要な存在となった。⁷³⁾ 日本の「南進」の歴史のことを考えるとき、堤林のような真摯な庶民が、真剣な人生態度から得た正当性の確信でもって、日本の南方関与を当然の使命として意味づけてみせた、という側面をけっして忘れることはできない。

堤林数衛の場合は、そのようなあまたの庶民の中でも、もっともすぐれた典型を生きてみせた存在ではなかったろうか。

73) 南洋商会が解散したあと、昭和12年、堤林数衛関係者は「南洋同人会」という組織をつくった。昭和15年当時、「今や正会員百五十名。其家族、店員を加へて五百名を突破し、南洋商会建設の基本精神たる南方発展を、身を以て実践し、蘭印邦人間に一勢力を形成するに到れり」という状態であった（南洋同人会編「南洋同人会」昭和15年参照）。